「え、だって、おじいちゃんから（　３　）聞かされたもん。おじいちゃんの海外修業武勇伝、※5セーディア社の歴史、苦労話、そしてすっごいライバル『大木製作所』の話」

「ライバルぅ？」

体を前のめりにしたじいちゃんが、アームチェアから転げ落ちそうになった。ぼくはあわてて手を伸ばして、じいちゃんの体を支えた。

「はい。品川区には昔いくつかイス専門の製作所があったけど、最後まで残ったのはセーディア社と大木製作所だけだったって。大木製作所って、小さいけど、とんでもなく腕のいいモデラーがいたって言ってました」

じいちゃんが、いつもはしょぼしょぼしている目を思いっきり見開いた。

「ほんとかい？」

「はい。たしか、有名建築家による和風ホテルや旅館、高級割烹などの設計に合わせた少量生産のイスを手がけたって聞いています。原寸模型から少量生産のイスまで作るところは、セーディア社と同じだったって」

じいちゃんは口をだらしなく開けている。よほどびっくりしているのだろう。また脳溢血でも起こしやしないかと、心配になってきた。

「大木製作所は、セレクトした木材を使った高級な和風のイスを作っていて、すごくいいライバルだったって、何度も聞かされましたから、わたし」

じいちゃんを見る梨々の視線が、尊敬の［　⑤　］になっている。

「いや、そいつは言い過ぎってやつよ。だいたい、セーディアとは規模がちがったからね。まあほら、それに、セーディアは洋風でモダンなイスが多かったよな。しかしあれから、どんどん大きくなっちまって、すごいねえ」

さっきのほうけた表情から急にきりっとした顔つきになって話すじいちゃんを見て、ぼくはほっとした。

「うちはね、昔はそりゃあもう、たくさん仕事をしたけど、その後、高級木材の和テイストのイスを置く店はどんどん減っちまってねぇ。カジュアルなホテルやレストランが増えてさ、安い輸入家具や大手チェーン店のイスが飛ぶように売れて、日本の小さいイス屋はいくつもつぶれたんだよ。セーディアはよく生き残ったねえ。まだ現役でやってるのかい、早川さんは？」

「はい。もう七十五歳なんですけど、まだあと二、三年はやるって言ってます」

「へえ。すごいもんだ。しかし、なんだねぇ、⑥まさかあの人が、そんなふうに評価してくれてたなんてねえ。昔オレは早川さんに追いつけ追い越せって、嫉妬心丸出しでさ、たまに組合で会ったりしても、あんまり口をきいたこともなくてねえ」

今までずっと、じいちゃんが※6早川宗二朗を憎んでいたと思っていたから、⑦古い友人をなつかしむような表情をしているのが意外だった。

「まあ、オレはへそ曲がりの頑固者だったからね、組合なんてのもめったに顔を出さなかったし。あの早川さんがオレの仕事を評価してくれてたとはねえ。そうかい、そうかい」

じいちゃんは小さく何度もうなずいた。よほどうれしかったらしい。目元にうっすらと涙がにじんでいるようだ。かあさんやオヤジに言わせると、じいちゃんは昔みたいにむっつりすることは少なくなったが、年のせいか脳溢血のせいか、怒ったり泣いたりときどあいらくが激しくなったらしい。それにしても、まさかじいちゃんが涙を見せるなんて、想像できなかった。

（佐藤まどか『一〇五度』による）

※1　この家　……元々は「じいちゃん」の家だったが、「ばあちゃん」の死をきっかけに「ぼく」一家が同居することになった。

※2　デザイナー　……イスなどの家具のデザインを考案する人。

※3　コンペ　……設計競技。課題に対して複数の設計者が競い合う。

※4　モデラー　……デザイナーのデザインを元に、家具を製作する人。

※5　セーディア社　……梨々の実家が経営している、イスのメーカー。

※6　早川宗二朗　……梨々の祖父で、セーディア社の創業者。

問　一　傍線部ａ・ｃのカタカナを漢字に直して書きなさい。

問　二　傍線部ｂ・ｄの漢字の読みをひらがなで答えなさい。